

IV-12

離島航路調査 — 港湾計画における調査手法 —

北四港湾建設局 正会員 森脇 敏雄

〃 〃 〇中山 茂雄

すなわち

港湾計画は調査を経て実行しつゝのもであり、調査はくしての計画はありえぬ。計画の種類や方法により調査内容も異なるが、調査を時系列 (Time Series) に見て分類すると、つぎの3種類に分けられる。

- 1) 現在までの経過と把握するための調査
- 2) 現状と把握するための調査
- 3) 将来の状況と確保するための調査

1) については従来その港湾がどのような利用とされてきたかということから、自然と人工の加わり方との関連を調査するものであり、2) は実態調査、3) は将来予測にたてである。

さらに調査を大体的手法により分類すると

- a) 技術調査
- b) 量的実態調査
- c) 経済調査

b) は貨物航路調査に近くあり、c) は経済発展や港湾の背後地の経済発展の条件はと調べるもので、ここに例として上げている離島航路調査も一つである。

調査の基本的姿勢

離島航路調査を例として上げる前に、まず調査を行はうに際しての基本的な考えを述べることにする。モノに着目すべきはその調査が全体の計画の中でのどの位置にあるかということと、明確に把握する必要があり、次には初期の計画の目的と達成させるためには、調査をどのように考へて行けばよいかということになり、各々構成する異なった種々の調査要素 (モジュール) が論理的に結合して一つの統一体を構成しているのであるから、このばらばらの要素、断片的に発する一連の事象と互いに関連づけてみるのが具体的調査の必要でありこれに対してはフロー・チャートを利用するのが最も簡単で誤りも少ないもので、さらに Check リストはとを利用すれば一層効果的であらう。

フロー・チャートの利便は、システムとして考えられる必要がある他、次の利便がある。

- 1) 調査の体系と把握できる
- 2) 取捨しの容易がたい
- 3) 重点的 (ウエイト付) 調査が可能である
- 4) 担当者以外にも内容をすぐ理解出来る

ここに北四港湾建設局が昨年度と今年度の2ヶ年に渡って調査計画した離島航路調査を例にとつてみる。九州、山口地区における離島 (全国の離島数3,659、総面積9,000平方キロ、内住民のいる島は461、人口で約200万人、国建管内の比率は数で40%、人口で50%、面積で70%を占めている。) のおかれていた位置から離島の港湾整備計画をいかに方向へ導いていこうかということと目的とするもので、調査の目標を「港湾施設に対する判断とすれば、要素として次頁のフロー・チャー

トが考えられるにありうし、要素相互の関連は矢印のように付ると思われる。この要素各々について、更に検討その調査項目が考えられ、項目のウエイト、バランス、資料の利用方向、精度のとり方調査の順序付などを系統的に整理した形で、さらに詳しい調査計画をねることに付る。それについては

- 1) 各項目付するに設定した要素に対峙するか
- 2) 得られた資料の数量はどのような過程を経てアクション(処理つき)に必要な情報と付るかデータの処理付どのようなにして行付うか
- 3) 項目についての結果は目的にそいうるか
- 4) 具体的調査付どのような手段で行付うか、また実施できるか

このように各段階での検討を経て最終目標に結びつけようであるが、体系的に判断し、表れと維持するため、また目標より付する付の付いよう、各段階でフィード・バックすることが必要である。

離島航路調査に付けるフロー・チャート

